

新世紀人文学研究通信

発行日：2024年7月1日

New Century Humanities Research News / 新世紀人文研究簡報 / 新世紀人文研究新聞 / 신세기
인문학 연구 뉴스 / ข่าวการวิจัยมนุษยศาสตร์แห่งศตวรรษใหม่ / Berita Penelitian Humaniora Abad Baru...

編集人 新世紀人文学研究会 〒813-8503 福岡市東区松香台 2-3-1

九州産業大学国際文化学部 酒井順一郎研究室 superfunkyjun@yahoo.co.jp

発行人 亜細亜総合企画工房 〒353-0005 埼玉県志木市幸町 1-7-17 hiroshtanaka724@gmail.com

【ごあいさつ】

新世紀人文学研究会は2017年3月に発足し、同時に研究誌『新世紀人文学論究』創刊号を刊行しました。以来、これまで内外の研究者、教育者とともに、それぞれの研究成果の発信の場として活動を進めてきました。ここ数年、論説資料保存会の論集にも複数本の論文が収録されるなど、少しずつではありますが、関心を持たれています。活動の実態はささやかなものですが、主義主張にとらわれない自由な共同のもとに、科研研究の成果を含め、新時代の国際的、学際的な人文学研究を進めていきたいと思っております。そこで、会員相互のコミュニケーションをはかるツールの一つとして、『通信』を年に2回、6月と12月に発行していきたいと思っております。世界はますます混沌とした様相を呈していますが、私たちが望むのは平和な共存共栄社会です。会員の知見が新しい学術研究の創出につながっていく一歩、大河の一滴になることを願っています。奇譚のないご意見をぜひお願いいたします。(会長：田中寛)

『新世紀人文学論究』第8号が刊行されました。(2024年2月刊行)

B5判、368頁、横組み。掲載論考の題目と執筆者は以下の通りです。

【思索の言葉】教育とは何か(上田崇仁) ◆【特集にあたって】「満洲国」における言語接触(酒井順一郎) / 「満洲国」における回教徒問題—1944年発表の富永理の調査報告資料を中心に—(酒井順一郎) / 偽満州国と植民地朝鮮の小学校日本語教科書における人物像の比較分析(中国語文)(徐雄彬、王詩淇) / 「満洲国」新学制後の「在満朝鮮人」初等学校第一・第二学年の日本語教科書に描かれた日本人像—漢民族学校との比較を視点に—(王詩淇) / 朝鮮・「満洲」における植民地官僚官舎の暮らし—在満少国民のライフストーリーを手がかりに—(北島順子、吉岡数子) / 「満洲国」の破綻要因を追究する—「五族協和」をめぐる—(朴仁哲、手塚孝典) / 坪田譲治「満洲・繪ばなし」にみる民衆・社会像(田中寛) / 満洲・間島地方の朝鮮人に対する教育施策(宮脇弘幸) ◆【植民地教育史研究・日本語教育史研究】戦時中の天津の音楽活動に関与する部門及び政策理念(楊慧) / 山口喜一郎の台湾における「成功体験」(王劍豪) / 南方特別留学生オマールの妹アザアジズと俳句—日本語教育につなぐ—(檜山純子) ◆【日中対照研究・日本語教育研究・言語文化研究】程度の大さを示す副詞と可能表現との共起について—中日対照の視点から—(韓樹坤) / 関連語によって生じる主語省略の研究—「なら」文と「如果」文を中心に—(中国語文)(祁吉曼) / 『紅樓夢』における形容詞重疊式と“的”の共起についての一考察(胡春艷) / “特別”と他の程度副詞との共起について(中国語文)(時衛国) / 日本語教育における新しい語形変化表の提案(石橋教行) / 反転授業という視点からみた大学での日本語教育(中国語文)(孫宇雷) / 知識共有コミュニティにおける中国イメージの考察—「Yahoo! 知恵袋」を中心に—(譚崢) ◆【日タイ言語文化研究】戦時下のチェンマイにおける日本軍と日本語教育との関係—チェンマイでの調査と共に—(山口雅代、川口泰広、ธนาภัทร บัญญู, วลัยพร กาญจนการุณ) / タイにおける東南アジア文学賞受賞作一覧(宇戸優美子) / 条件文をめぐる日タイ言語対照研究—分類方法と条件用法に関する比較考察—(ピヤトーン・ケウワッタナ) ◆【高橋和巳研

【究】高橋和巳『墮落』再論—手段の目的化をめぐる省察—（東口昌央）／高橋和巳『邪宗門』と『日本残酷物語』に関する一考察（太田寛）◆[彙報]研究会報告、研究大会会則・投稿規程、執筆者一覧、編集後記

エッセイ(1)

ジャカルタの風に吹かれて（会長：田中 寛）

ふとしたきっかけでインドネシアのジャカルタに短期滞在することになった。目的は、当地の教育機関でおこなわれている日本語教育の視察、および助言を与えるというものである。長年の知人からの紹介で、これまで半世紀近く日本語教育に携わってきたので、大学を停年退職した身には格好のお手伝いということで食指が動いた。インドネシア全土に数十カ所の初等教育から初中等教育の施設を持つ財団の招へいで、9月初旬から中旬にかけて二週間当地を訪れた。

出発の日が近づくにつれ気分が高揚した。というのも、二十代の頃、勇んで東南アジアのタイに出向した青春時代がよみがえったのである。当時のバンコクはジャカルタとともに反日運動の拠点でもあった。高度経済進出の波に乗って日本企業が怒涛のごとく進出し、公害をまきちらした。私はタイでそうした経済格差を少しでも是正するためにと、日本の現地への工業技術の移転、それにとまなうタイ人のための日本語教育のプランニングという遠大な構想、方針のもとに派遣された。そこでの現地の人々との交流は、以後の私の人生のおおきな糧となった。しかし、時は流れ、時代は変わった。

ここ数年は中国の進出がめざましく、日本の影は薄くなっている印象がある。日本製品よりは中国製品が席卷している。経済市場のみならず、政治的な関係にも覇権は浸透しつつある。そこに日本のプレゼンス、存在感をどう示していくべきか。インドネシアは東南アジアの大国である。若い世代の中から、将来の日本との友好交流を担う人材が生まれることが大いに期待されている。

忘れてはならない歴史がある。かつてインドネシアは「蘭印」、すなわちオランダ領インドネシアと称されていたが、太平洋戦争が勃発するや日本軍は南方進駐を大々的に推し進めた。豊かな資源に目を付けたのである。大東亜共栄圏の構想の下、日本語の普及、皇民化教育が進められ、各地に日本語学校が設立された。インドネシア現代史研究の権威、倉沢愛子氏（慶応大学名誉教授）によれば、当時南方と言われた軍政下ではインドネシアで最も組織的な日本語教育が行われたとされる。そして多くのインドネシア人が泰緬鉄道をはじめ過酷な労働に使役され、「ロームシャ」という日本語はインドネシア語にもなった。国際交流基金の調査によれば、現在インドネシアにおける日本語学習者は中国に次ぐ世界第二位になっている。日本にとって重要な親日である。純真な少年少女に接し、こうした過去の遺産をこえて、信頼できるパートナーの構築はまず言語からである。これからも微力ながら彼らとの友誼をはぐくんでいきたい。



*写真はオランダ植民地時代の遺構にて。（『潮』2024年7月号「波音」より転載）

エッセイ(2)

日本語教員の資格についての私見

副会長：上田崇仁（南山大学）

日本語教員の資格は、2024年度に国家資格化されました。それに先立ち、2023年、国は「日本語教師養成・研修推進拠点整備事業」をスタートさせました。私の勤めている南山大学も手を挙げ、全国8大学の一つとして採択されました。現在、中部地域の拠点として事業を展開しています。私は、戦前の日本語教育について、「国家が日本語教育にかかわってきた時代」と表現しました。しかし、現在の状況を見ると、日本語教師の国家資格化、「日本語教育の推進に関する法律」の制定・施行、日本語教員養成機関の登録制度、日本語教育機関の認定制度など、戦前には存在しなかった国家のかかわりが日本語教育に見られるようになりました。これはどういうことなのか。日本語教員養成における教育内容50項目には「日本語教育史」が明示されています。過去を知り現在を考え未来に向かう、それが形となっていることはうれしいことです。この後、日本語教育はどう進んでいくのか。この時代に、自分は何ができるのか、自分の中の思いをどう形にするか、試行錯誤の日々です。

エッセイ(3)

中国国内における大学専攻としての日本語科の増減

副会長：時衛国（中国・山東大学）

ここ二、三年来、中国国内の大学には、専攻としての日本語科の増減、規模縮小ないし廃止など大きな変化が起きている。河南省のある大学では、毎年学部生1クラス（定員は30人程度）の規模を維持してきたが、入学希望者が多かった昨年度からは二つのクラスに倍増した。一方、定員を割ったため規模縮小の大学もあり、たとえば、山東省のある大学では、長年維持してきた2クラスが急に1クラスに減らされた。さらには、昨年度から募集終止の大学も出てきた。その中で、同じ山東省のある大学では、来る2025年度に日本語科を一専攻として新設する予定だという。

一喜一憂の状態が続く。クラス規模の再編成や募集定員数の減少などの原因は、日本語科の過剰な設立や日本語のわかる人材の飽和、日系企業の撤退による就職口やニーズの減少及び対日感情の変化などが挙げられる。この難局を打開するための知恵が必要であると思われる。ひるがえって、日本の大学の中国語学科の現状はどうだろうか。中国と日本との良好かつ健全な関係維持、発展させるためには、双方の“持続可能”な人材養成が不可欠であり、今後の信頼構築のためにも焦眉の課題である。

エッセイ(4)

有標であること

大会委員長：富田哲（台湾・淡江大学）

まもなく在台四半世紀ということになる。もちろん身の回りで、2000年ごろと今日をくらべて大きな

ちがいを感ずることは少なくはない。たとえばタクシーに乗って行き先を告げた後で、「どこから来た？」(他に「日本人？/韓国人？/どこの華僑？」なども)と聞かれることがあまりなくなった。運将(日本語の「うんちゃん」からきた台湾語)と客の関係が昔ほど近いものではなくなったのだとすれば、それはそれでさびしいことだが、社会言語学的に考えれば、ひとことだけであれば有標の中国語とはみなされない程度に、私の能力が向上したということなのか。あるいは、今日の運将が有標の中国語には以前ほど関心を持たなくなったからだろうか。

電車内で本を読んでいるときに「日本語だね」と横の人から言われることもあった。日本語の書籍を読むことが有標の行為として機能していたからだが、これもほとんどなくなった。周囲に対する無関心、あるいはスマホにせよ紙の書籍にせよ、他人の読んでいるものを「のぞきこむ」という行為がはばかられるようになったからだとも考えられるが、これは世代的な要因も大きいだろう。かつて声をかけてこられたのは、多くが日本統治期に日本語を習得した方だった。

世代と言え、たしか 2000 年だったと思うが、電車内で何かきっかけでことばをかわしたとなりの客が、「満州国」の師範学校で勉強し、国民党政府にしたがって台湾にわたって来た方だったということもあった。退職前のものとして、教育関係の国立機関の役職の名刺をいただいたが、彼にとって私の中国語が有標でなければ、このような話にまで発展することはなかったであろう。「われわれの日本語と台湾人の日本語はだいぶちがうと感じた」とおっしゃっていたが、おたがいにとって相手の日本語には、あきらかに有標性があったのだろう。

余談ながら、「満州国」の初代外務大臣は台湾・新竹出身の謝介石(台湾協会専門学校(現拓殖大学)で台湾語を教えた経歴あり)だが、国民党政府とともに台湾にわたって来た「満州国」出身者も少なからずおり、戒厳令下や民主化期の政治史にしばしば名前が出る元国会議長の梁肅戎もその一人である。彼が存命中、日本の某テレビ局台北支局のアシスタントが電話を入れたところ、「日本語はだいぶ忘れてしまったが、ぜひ遊びに来てくれ」と言われたそうである。

ちょっとした発話はともかく、台湾社会において自分の中国語がいまだに有標であることは否定のしようがない。四半世紀前には、いずれ自分の中国語が無標になる日が来るのかもと思っていたが、どうやらそういうことはなさそうである。台湾語にかんしては有標か無標かというレベルにすら達していない。言語的に有標であり続けざるをえないのだとすれば、これから自分はどのような態度でことばを発していけばいいのか。有標であるがゆえの不愉快な経験をしたとき、いかにその不当性を相手に伝えれば理解をえられるのか。中国語がすでに無標の域に達している(ように私には見える)海外出身の複数の知人を見ながら、そこには到達できていない自分のこれからのふるまいかたに思いをめぐらせている。

特別読み物

韓国・釜山訪問で思ったこと

事務局長：酒井 順一郎（九州産業大学）

小生のゼミ（九州産業大学国際文化学部日本文化学科）のことで心苦しいが、実は REAL JAPAN PROJECT と題し、毎年、海外の教育機関に訪問し学生交流を行っている。これを行っている理由として、国際社会における日本の衰退に危機感を持ったからである。日本の存在感を国際社会にアピールするためにも印象論的な日本文化・社会像ではなく、若者にとって身近で、余り知られていない日本

文化・社会を発掘し海外に紹介し、それと共に訪問した国の社会・文化については同世代の現地の学生からプレゼンテーションを行ってもらい、両国の相互比較や課題を討論しようというものである。

ゼミ会議で今年はどこに訪問すべきか話し合うのであるが、昨今の円安、経済的な問題から遠方の国は避けようということになった。また、ゼミ生は所謂「Z世代」である。彼らにとって韓国は、エンターテインメント、食文化、ファッション、美容まで憧れのものであり、身近なものでもある。また、学んでいる韓国語を現地で試したいという気持ちも強くある。そこで、本学がある福岡から飛行機1時間弱で行ける釜山に決まったのであった。

決定後、すぐに釜山外国語大学日本語創意融合学部にお願ひし、我がゼミ生を松浦恵子副教授が受け入れていただけることになったのである。松浦恵子副教授は、継承語の研究をされており、日本語教育にも造詣が深い方である。

5月22日、我々ゼミ一行（10名）は釜山に向かった。小生以外、ゼミ生全員が釜山は初めてである。到着後、ホテルまでの道のり、まず、彼らが口を衝いて出たのは「高齢者と外国人しかいない。」というものであった。想像した韓国の姿ではなかったせいか、戸惑っていたようであった。

ホテルチェックイン後、すぐにグループに分かれて釜山調査に取り掛かった。小生は学芸員の資格取得を学んでいるゼミ生のグループが博物館巡りをするというので同行した。行き先は釜山博物館、国立日帝強制動員博物館である。まず、最初に足を運んだのが釜山博物館である。釜山における旧石器、高麗、朝鮮王朝、植民地、戦後のそれぞれの時代が集約されており、約5,000点を超える文化財を見ることができ、その展示のレベルは高いといえよう。しかも、入場料は無料である。

周知の通り、釜山は日本との関係が深い。釜山開港後の日本との関係の展示もわかりやすく、朝鮮通信使の行列はデジタルで復元されゼミ生は楽しんでいただけたようである。また、彼らは、韓国映画『国際市場で会いましょう』を観ていたため、朝鮮戦争時の釜山に興味を示していた。2014年に制作されたこの映画は、興南撤収作戦で、避難途中で主人公のトグスが父と妹と離れ離れとなり母と残された弟と妹と一緒に釜山に逃げ、そこで成長していくという映画である。しかし、ゼミ生にとって、朝鮮戦争開戦後、僅か3日でソウルが陥落したこと、そして、朝鮮戦争時、釜山が臨時首都であったという知識はなく、同博物館で初めてこの知見を得ることとなった。今後、朝鮮半島有事の際、地理的に近い九州に避難民を収容することは十分にある。したがって、小生としては本学が福岡にあるということら、学生に対しては朝鮮半島と大陸との関係を意識させながら、大学での学びを指導しなければならないと改めて強く感じたのであった。

釜山博物館だけで、2時間半以上所要してしまい、急ぎ国立日帝強制動員博物館に行くことにした。この博物館は2008年に韓国が国を挙げて建設したものである。それは地上3階、地下4階の建物であり、韓国政府が収集した手記、写真、博物類が展示されている。ゼミ生にとって、強く影響をおよぼしたのが、タコ部屋、炭鉱の労働現場、慰安所などの復元物と異国の地で亡くなり帰国できなかった人々を追悼するために位牌が安置されている「記憶の場」というコーナーであった。一同、寡黙になり、近代史の知識不足を再度確認すると同時に居心地の悪さも感じたのであった。

日本政府の労務動員政策として戦時期に一般募集、官斡旋、徴用などで日本国内だけでなく、植民地、占領地に動員されたのであるが、ここでは「強制」かどうかを論じるつもりはない。福岡県も関係が深く、多くの朝鮮半島の人々が釜山、工場、土建運輸関係に徴用されていった。ゼミ生はこれらを何となく曖昧に知ってはいるが、おそらくこれらの史実を受け入れるまでは時間要するであろう。

翌日、5月23日、我々ゼミ一行（10名）は釜山外国語大学日本語創意融合学部を訪ひし、キャンパ

スツアーをした後、両大学の学生によるプレゼンテーションと討論会が始まったのである。事前にオンラインで両大学の学生が打ち合わせし、テーマを両国の共通社会課題である出生者数・人口減少、高齢化の問題にしたのであった。

ゼミ生による日本の人口急減、高齢化と出生率低下を解説し、福岡県の人口も2050年までに13%減少する見通しであることを報告した。その後、釜山外国語大学の学生から2022年から2070年までに5,167万人から3,160万人に人口が減少し、釜山も30年後には30%も人口下減少し、やがて消滅するであろうと報告があった。韓流ブームの洗礼を受け育った所謂「Z世代」のゼミ生にとって韓国は憧れの国でもあった。この報告を聞いたゼミ生一同は韓国が地球上から消えてしまうのではないかという不安の表情を隠すことはできなかった。その後、改善策を討論するのであるが、結論は出ない。小生が思っている以上に学生は人口減少によってどのような社会になっていくのかを危機感を抱きながら理解している。しかし、多くは自分たちが結婚し子どもをもうけるという考えを必ずしも持っていなかった。さらに、両国の学生の多くは海外移住を真剣に考えていたのであった。その場には何やら国に依存せず生きていこうとする渦が巻いていたような気がしたのであった。つまり、国という概念のない社会構築が始まっているのではないだろうか。

他にも過度な学歴社会の弊害も問題点、大学の存在意義、さらには受験のための教育と幸福の関係など日韓両国の学生が日頃疑問に思っていることを熱く発言していた姿に、一人の大学人として深刻に受けとめると共に自らの非力を痛感したのであった。尚、余談であるが、韓国の大学関係者に聞いたところ、韓国の大学は少子化の生き残り対策として、日本の高校との協定、日本に大学の分校を設立する動きがさらに活性化されるであろうという。日本の大学も危機感を抱く必要がある。

最後に、今回のREAL JAPAN PROJECTと題した韓国合宿を通して、両国の学生が、彼らの納得する人生、社会を創ることができることを祈るばかりである。非力な小生ができることは人種、イデオロギーを越え共に考え討論する場を提供することである。

『新世紀人文学研究』第9号(2025年2月刊行予定)の原稿募集と特集予告

特集：「日本語教育史研究の諸問題——現状と課題」

新世紀人文学研究会の研究誌『新世紀人文学論究』では毎号特集を編んでいます。9号(2025年2月刊行予定)では標記のような特集を企画しています。これまで日本語教育研究は内外の研究者によって多方面において着実な成果を上げてきましたが、いまなお、その全貌を覆うには至っていません。

日本語教育史研究には教科書比較研究、人物研究、教授法研究など、また地域に至ってはアジア、欧州、北米・南米、など多方面にわたり、時代別では中世のキリシタン文献の研究、宣教師の日本語教習を始め、近代では漢字を媒介にした言語伝播にも光が当てられています。一方、小誌でも積極的に発掘してきました、戦時下(主として第二次世界大戦、アジア太平洋十五年戦争)における日本語教育については、多くの未開拓の問題をはらんでいるように思われます。特集では現在の研究状況を批判的に発展継承し、新しい視点、今後の課題を提供していきたいと思っています。言語接触を通して、日本語教育史研究を平和教育学の一環としてとらえたいとの期待があります。現在の多文化、多言語研究・教育に通底する課題でもあると思われます。積極的なご投稿をお待ちしています。

毎年、大量の論文が出される中、本研究誌は論説資料保存会の資料集にも毎年、数本の論文が収録されるようになり、微力ながら学界に寄与していますが、これからも充実した成果を内外に発信していきたいと思っております。皆様のご支援、ご参加を期待しております。

なお特集記事と同時に一般自由論文の投稿も受け付けております。申込み締め切りは2024年7月末日、原稿提出締め切りは2024年11月末日です。

執筆要領などは研究会ホームページ (<http://shinseiki.net/>) をご参照ください。

【書評】

広中一成著『後期日中戦争 ——太平洋戦争下の中国戦線』／ 『後期日中戦争 華北戦線 ——太平洋戦争下の中国戦線Ⅱ』

著者の広中一成氏は1978年生まれ。気鋭の中国現代史研究者である。本書はそれぞれ2021年4月、2024年3月に刊行された。いずれも角川新書（角川書店）。続編に「華北戦線」という名称が付されているのは、戦線が当該地域に集中し、かつ被害が甚大であったことによるのだろう。以下、それぞれ〈Ⅰ〉、〈Ⅱ〉として目次を示す。

〈Ⅰ〉はじめに／第一章：最初の敗北——第二次長沙作戦／第二章：細菌戦の戦場——浙贛（セツカン）作戦／第三章：暴虐の戦場——江南殲滅作戦と廠窖（ショウコウ）事件／第四章：毒ガス戦の前線——常德殲滅作戦／第五章：補給なき泥濘の戦い——一号作戦（大陸打通作戦）／おわりに

〈Ⅱ〉はじめに／序章：「後期日中戦争」前の華北戦線／第一章：八路軍との容赦なき戦い——河北省／第二章：「戦争犯罪」の戦場——山東省／第三章：災害との戦い——河南省／第四章：「鬼」と「鬼」との化かしあい——山西省／第五章：終わらない「後期日中戦争」／おわりに

〈Ⅰ〉、〈Ⅱ〉とも巻末に「本書関連年表」「参考文献一覧（未公開資料）、日本語文献（書籍・雑誌記事・論文）、中国語文献」を収録している。新書版ながら教養書というよりも、近年の成果を採り入れた研究書の趣きがある。日中戦争は盧溝橋事件の発生した1937年7月から終戦の1945年8月まで続くが、1941年12月に勃発した太平洋戦争までを「前期日中戦争」と呼び、以後、1945年8月の敗戦までを「後期日中戦争」として扱っている。戦場が拡大すると、日中戦争は様相が一変していく。「前期」では盧溝橋事件、通州事件、上海爆撃、南京事件（南京大虐殺）、重慶爆撃などに焦点があてられるが、「後期」はさらに多方面で戦争拡大、残虐性が増した。

日本人は日中戦争を未だ知らない。若い世代は、一元的な歴史教育によって、太平洋戦争があったことは知っていても、同時代に日中戦争があったことを知らない、著者の一貫した主張は「中国戦線は太平洋戦争に引きずり込まれていた」「中国戦線は世界戦争（世界大戦、筆者注）と連動する戦場であった」

（いずれもⅠ、Ⅱの帯文）ことに集約される。確かに日本人の多くは太平洋戦争に焦点を当て、その期間に中国大陸でどのような戦闘が行われていたかに注目することは少ない。いや、ほとんどないといっているのではないか。「後期日中戦争」は太平洋戦争に呑み込まれた格好になっていて、その真実はなかなか日本現代史にも記憶・記録されずにいた。本書はその意味で、日中戦争の後半期に問題群を提起した労作である。以下、若干の関連文献（濃字）をあげながら書評をこころみる。

著者は綿密な調査と証言聞き取りによって、詳細な戦闘の現場を再現した。細菌戦、毒ガス戦という国際条約に違反した戦争犯罪についても的確に言及している。ただ、〈Ⅰ〉の常德では毒ガス戦が取り上げられているが、むしろ甚大な細菌戦の記憶に言及すべきでだろう（轟莉莉『中国民衆の戦争記

憶—日本軍の細菌戦による傷跡』明石書店、2006)。さらに毒ガス戦では湖北武漢での毒ガス兵器使用にも触れる必要がある。〈Ⅱ〉の第一章の河北省の舞台では、日本軍の掃討作戦による三光作戦、とくに定県北垣村で使用された毒ガス戦について詳細な記述がある。毒ガス戦の実態は、山西省においてより大規模に展開した。この実態については、すでに日本でも研究調査が進められたことはよく知られている（栗屋憲太郎編『中国山西省における日本軍の毒ガス戦』大月書店2002）。

こうした日中戦争の軌跡をどう共有認識すればいいのだろうか。教育の現場では旧態依然で、改善の兆しは見えにくい。市民講座の存在、発信の在り方も問われるだろう。

筆者は1984-1985年に湖南省長沙にある湖南大学外国籍教師として滞在し、戦時下の深刻な被害について多くを見聞したことがある。常德へは2008年に現地を慰霊訪問した。近々ではコロナ禍の前年2019年8月に河北省の激戦地を訪問した。唐山県の潘家峪である。日本軍の掃討作戦で甚大な被害を与えた地域で、当地には殉難者の墓苑、当時の虐殺の現場、掃討作戦を指揮した日本軍の指揮所が再現されていた。当地はまたレッドツーリズム観光地（紅色景区）としても注目されていた。そこで目にしたのは、地元の研究者、民衆によって設置された戦争博物・記念館である。こうした施設の存在は日本ではほとんど知られていない。当地を訪問する際の交通の不便さもある。歴史検証、研究は、どのような資料を駆使し、どの角度でどこに焦点をおいて進めるかで、様々な事態がうかびあがる。未だに日中、日韓、東アジアで歴史見解（歴史認識）が共有されないのはこうした複雑な要素がからんでいるからだろう。

日中戦争研究については、これまで少なからず研究の蓄積がある。詳細は波多野澄雄「研究ノート 日本における日中戦争史研究について」（『外交史料館報』第31号2018年3月）があり、最近のおよそ2015年までの日本での成果であるが、その後も笠原十九司『日中戦争全史（上・下）』（高文研2017）、波多野澄雄他『決定版日中戦争』（新潮新書2018）、関智英『対日協力者の政治構想——日中戦争とその前後』（名古屋大学出版会2019）、川島真・岩谷将編『日中戦争研究の現在——歴史と歴史認識の問題』（東京大学出版会2022）、岩谷将『盧溝橋事件から日中戦争へ』（東京大学出版会2023）などが続く。

繰り返し言おう。多くの日本人は、日中戦争を未だ知らないし、知ろうとしない。——そのことが中国の日本に対する不信感、不満を覆っていることを再認識する。本書によって、日中全面戦争から太平洋戦争への展開、歴史の並行性を複眼的に見ることの意義を教えられる。（T.H生）

〈Ⅰ〉277頁、定価920円＋税／〈Ⅱ〉301頁、定価960円＋税
『ABC企画NEWS』（ABC企画委員会）第146号（2024.4.）より転載

お知らせ

2024年度研究大会の開催について

2024年度の研究大会は12月に九州産業大学で、対面とオンラインによる開催を予定しています。詳細は、HP（<http://shinseiki.net/>）にて発信してまいります。随時ご参照ください。

編集後記

天候不順な日が続いていますが、お見舞い申し上げます。研究会発足7年目にして『通信』を発行します。委員の方をはじめ、会員皆様の近況をお伝えし、交流の場としたいと思っています。予定では7月、11月を予定しています。皆様には奇譚のないご意見をお寄せくださいますよう、お願いいたします。また、皆様のご入会（入会費無料）をお待ちしています。

Shiseiki Hikari-Motarasu Jinbungaku Tomoni-Tazusae Ippo-Susuman. (T.H生)

